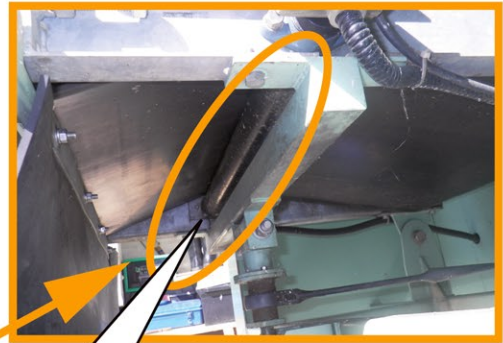


## ドラム式貯留排出機



## 機械下部拡大写真



ローラー部分に両腕を挟まれる

機械下部から清掃作業を実施

ターナイフで切断し、さらに露出した鉄製の受け台を充電式切断機で切断したことで、機械上部からの要救助者の状況確認が可能となった。そして、T隊長が見極めたとおり、ローラーを下降させたことで間隙ができ、右腕はすぐに抜くことに成功した。

「後は、奥深くまで挟まれた左腕…とM隊長が救出方法について思案した時に、「レスキューツールの準備はできています。いつでもいけます」と隊員からの進言。M隊長はすぐさまレスキューツール挿入箇所を指示し、その指示を忠実に体現する隊員の資器材操作技術により、奥深くまで挟まれていた左腕をローラーと鉄製受け台の間隙をレスキューツールスプレッダーでゆっくり、慎重に押し広げ無事に救出することに成功した。

早急な現場把握と状況判断、全隊員への救出方法の周知徹底、隊員間のコミュニケーションを確実に図ったことにより、先を予想した動きを生み、長時間を要する機械事故において23分という短時間での救出に繋がったと患慮する。

### ▼帰署——そして…

帰署後のミーティングで、「複数隊が出場する災害現場において、効率よく安全に作業するには、人員の整理、各隊員への的確な任務分担、救出方法の周知徹底、そしてコミュニケーションが重要になる。今回の活動はそれを具現化した最高の活動であった」とM隊長は隊員に伝えた。

「今回、先着した救助隊2隊は同じ消防署の配置であり、日頃から合同で訓練を実施していたことから、スムーズな現場活動が行えた。しかし、大阪市内には28隊の救助隊があり、距離の離れた行政区の救助隊とは連携訓練を実施することは困難で、今回そんな隊との活動であったと考えるとスムーズな活動が行えたかどうか自信はない。」とM隊長は思う。

今後は、市内28隊の救助隊と今回のような連携した活動を実施できるように、積極的な連携訓練を実施していく必要があると深く考えさせられた事案であった。(文責 南野)